

茨城県土浦市

尻 冷 南 遺 跡

—宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

茨城県土浦市

尻 冷 南 遺 跡

—宅地造成工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序

上浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところがありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、興和物産株式会社の宅地造成工事に伴い、新たに発見された尻冷南遺跡の発掘調査による記録保存目的として行われたものであります。

遺跡内からは、今から約8,000年前の縄文時代早期の生活の痕跡と、中世以降の時期の滌跡などが確認されました。

この調査によって、中貫地区の古代文化の発明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、興和物産株式会社をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成11年3月

土浦市教育委員会
教育長 尾見 彰一

例　　言

1 本書は、興和物産株式会社の宅地造成工事事業に伴う、同市大字中貫字境ノ町1466外に所在する尻冷南遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は興和物産株式会社の委託を受け、土浦市遺跡調査会が実施した。

3 調査期間は1993（平成5）年4月19日から4月23日である。調査面積はおよそ530m²である。

4 発掘調査は関口　満が担当した。

5 本書の編集は福田礼子が担当した。

6 本書の執筆は、調査に至る経緯とまとめを関口、他は福田が行った。

7 整理作業分担は下記のとおりである。

実測遺物選択　（石器）雨宮瑞生　（縄文土器）関口

遺物実測　　（石器）雨宮・窪田恵一

遺構図版作成　窪田恵一

遺物図版作成　福田

写真　　関口

8 整理作業は上記担当指導のもと、下記の分担で行った。

拓本（遠藤成江・川田光子）、トレース（窪田）

9 本調査及び報告書作成にあたっては下記の方々にご協力・ご指導頂いた。記して感謝の意を表したい。

興和物産株式会社　株常陸測建　茨城県教育委員会　県南教育事務所

10 本遺跡出土資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。

凡 例

- 1 遺構番号は現地調査と同様のものである。
- 2 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」(日本色研事業株式会社)を使用した。
- 3 各遺構の実測図は1/20の原図を使用し、縮尺1/3を基本とし、溝は1/300とした。
- 4 実測図中の標高はすべてm単位で示してある。
- 5 実測図中の破線は推定線を示している。
- 6 遺構実測図中のスクリーントーンは「焼土」の意味で使用している。
- 7 遺物の縮尺は1/3を基本とした。
- 8 遺物実測図中のスクリーントーンは「繊維混入」の意味で使用している。
- 9 出土遺物の中で土器等は文章で説明し、石器は文章と表により説明している。表中のNoは実測図中のNoと符合する。
- 10 遺物図版の番号と写真図版の番号は一致する。

目 次

序	1
例言	2
凡例	3
目次	4
調査に至る経緯	1
遺跡概観	1
検出された遺構	4
出土遺物	6
まとめ	11
抄録	
調査組織	

図版目次

第1図 調査区と周辺の地形	2
第2図 周辺の遺跡	3
第3図 遺構全体図	4
第4図 1・2号炉穴、1~3号土坑	5
第5図 1号溝	7
第6図 出土遺物-1	9
第7図 出土遺物-2	10
第8図 出土遺物-3	11

写真図版

P L 1	遺跡遠景・確認調査状況
P L 2	1・2号炉穴
P L 3	1~3号土坑
P L 4	1号溝
P L 5	出土遺物(1)
P L 6	出土遺物(2)
P L 7	出土遺物(3)
P L 8	出土遺物(4)

調査に至る経緯

平成4年3月2日に興和物産株式会社より、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が提出された。その内容は約12,800m²の土地において、宅地造成工事を行なう趣旨のものであった。このことを受け土浦市教育委員会では、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施した。この結果、前協議申請地は「周知の遺跡」ではないが、現地地表面に土器片の散布が見られたため、事業主及び地主の協力を得て埋蔵文化財確認調査を実施した。確認調査は平成5年4月7日に、重機を使用してトレーンチ調査により実施した。この結果、申請地内から埋蔵文化財が確認され、尻冷南遺跡として、茨城県教育委員会及び文化庁宛てに遺跡発見の通知を提出し、遺跡台帳に登録した。

この後事業主と土浦市教育委員会との間で、「埋蔵文化財の取扱い」についての協議を重ねた。申請地は造成事業による削平が予定され、現状保存が困難であるため、埋蔵文化財の発掘調査による記録保存を行うことで合意した。本調査は、確認調査時に遺物、遺構の未検出部分はその対象から除外した。

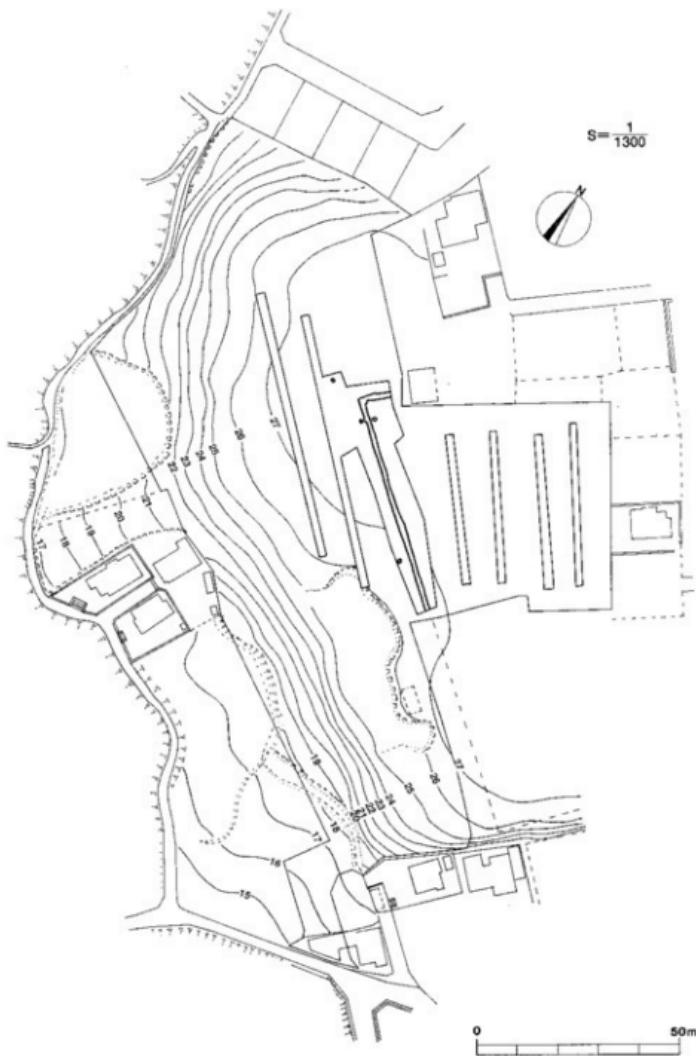
発掘調査は平成5年4月19日から4月23日まで実施した。

遺跡概観（第1・2図：PL1）

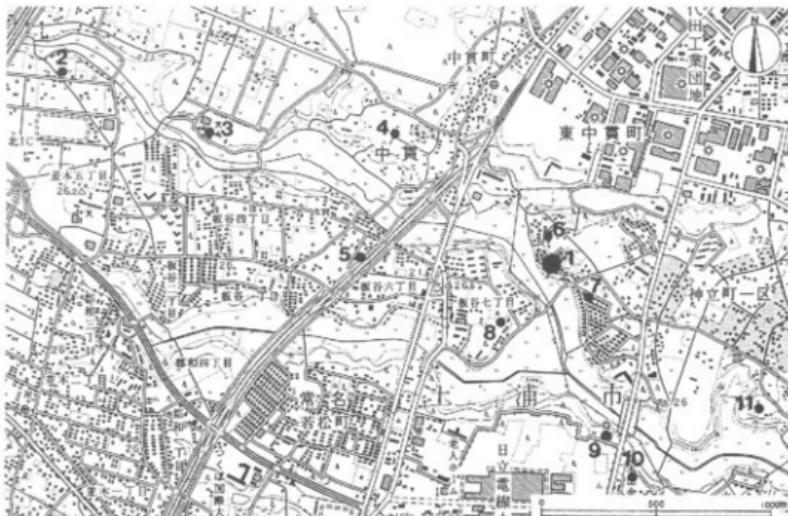
土浦市は東に霞ヶ浦を望み、市内のほぼ中央を流れる桜川により形成される低地と、北側の新治台地、南側の筑波・稲敷台地から成り立っている。新治台地は筑波山塊から南東方向に延びており、台地南側は霞ヶ浦に流れる小河川により浸食されている。この河川は源流が土浦市と新治村の境界付近にあたり、河川の長さが短いためか沿岸部はあまり複雑に開析が進まず、比較的単調である。河川は神立町と木田余地区の境付近から周辺地域の住宅化・工業団地化に伴い、下水路化してしまい中貫都市下水路と呼ばれるようになる。そしてJR常磐線を境とし名称を境川と言え霞ヶ浦へと注いでいる。

尻冷南遺跡はこの中貫都市下水路へと注ぐ、上流の小河川左岸の低地に向かい張り出した台地縁辺部に位置しており、標高は約27mを測る。

周辺には数多くの遺跡が存在しているが調査例は少なく、破壊を逃れている遺跡が多く存在している。古くは旧石器時代からの足跡が見られ、遺物としては対岸に位置する東山団地遺跡（8）から出土した黒曜石製のナイフ形石器があげられる。縄文時代になつても遺構は確認されておらず、土器片の散布が見られるに留まっている。中都遺跡（2）からは前期末葉・中期、西山遺跡（3）からは前期（浮島式）・中期（加曾利E式）、尻冷遺跡（6）・前山遺跡（7）からは前期



第1図 調査区と周辺の地形



第2図 周辺の遺跡（国土地理院発行 1/25,000 に加筆）

の土器片が採集されている。弥生時代に入ると東山团地遺跡において後期の集落が営まれており、県内でも珍しい磨製石鎌が出土している。続く古墳時代は同じく東山团地遺跡において中期の住居址2軒、後期の住居址1軒（鍛冶工房）が検出された。また一丁田台遺跡（9）でも中期の住居址が3軒確認されたが、報告書刊行には至っていない。平安時代に入ると遺物が西後遺跡（4）・前山遺跡・前神田遺跡（11）で採集されるに留まり、以降の時代は非常に希薄となる。

—参考文献—

1984 「土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－」 土浦市教育委員会

1996 「東山团地遺跡」 土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会

周辺の遺跡一覧表

No.	黒No.	重No.	遺跡名	施	田	種	弥	古	春・平	中世	近世	備考
1	—	C-78	尻冷南遺跡		○		○		○	○	○	
2	5330	C-52	中都遺跡									
3	5312	C-27	西山遺跡		○		○					土師器としか不明
4	5311	C-26	西後遺跡				○	○				
5	5310	C-25	板谷遺跡				○					
6	5308	C-23	尻冷東遺跡		○		○					
7	5307	C-22	前山遺跡		○			○				
8	5309	C-24	東山团地遺跡		○		○	○				1996 報告有
9	5302	C-17	一丁田台遺跡					○				
10	—	C-68	二丁田台東遺跡									
11	5298	C-13	前神田遺跡		○				○			

検出された遺構

本遺跡より縄文時代と思われる炉穴2基、土坑3基、中・近世以降と思われる溝が1条検出された。以下遺構毎に述べていく。

1号炉穴（第4図：PL2）

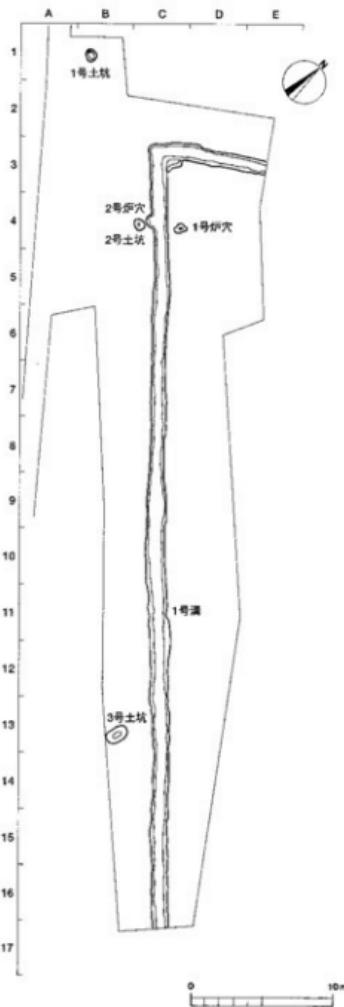
位置 C-4グリッド。1号溝を挟み2号炉穴と対峙する。規模・形状 長径90cm、短径55cmの不整形を呈する。坑底は起伏を有し、北側で数ヶ所ブロック状の焼土面が残る。壁は緩やかに外傾し、深さ38cmを測る。覆土 第7層を除き全てに焼土粒が混入しており、第5層で比較的多く見られた。遺物 出土していない。所見 調査範囲より多く出土する縄文時代早期土器片から該期の所産と考える。

2号炉穴（第4図：PL2）

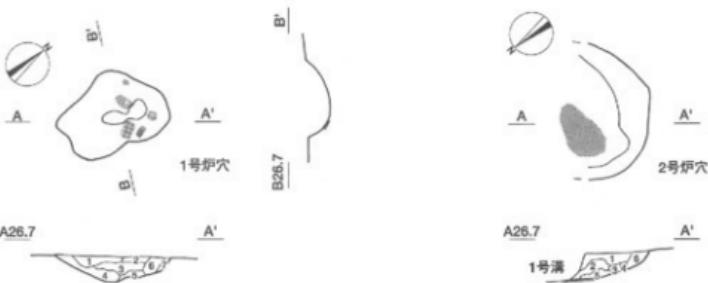
位置 C-4グリッド。北側で1号溝と重複しており、本遺構が占い。規模・形状 (105×70) cmで坑底は緩やかに起伏し、立ち上がる。坑底の北側に焼土面が残る。深さ42cm。覆土 全体に焼土粒の混入が見られるが、第2・5層は特に多量で盛り上がった状態で堆積していた。遺物 出土していない。所見 調査範囲より多く出土する縄文時代早期土器片から該期の所産と考える。

1号土坑（第4図：PL3）

位置 調査区北端B-1グリッド。規模・形状 長径94cm、短径74cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。坑底は平坦で開口部と相似形をな



第3図 遺構全体図

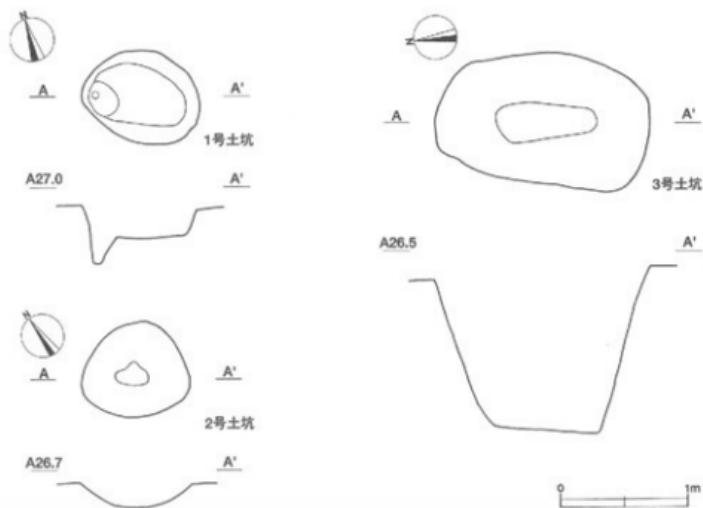


1号炉穴

- 1 褐色土 焼土小少、同粒中、ローム中微、同小少、同粒中、黒色土大少。
- 2 明褐色土 焼土小少、同粒中、ローム中微、同小少、同粒多、ハードローム中・粒混入。
- 3 褐色土 焼土小・粒中、ローム中微、同粒多、ハードローム中・粒混入。
- 4 褐色土 焼土小・粒少、ローム中微、同粒中、ハードローム中・粒混入。
- 5 褐色土 焼土大・小少、同粒多、ローム粒少。
- 6 褐色土 焼土小・粒少、ローム粒多、ハードローム中・粒混入。
- 7 褐色土 ローム小・粒多。

2号炉穴

- 1 薄褐色土 焼土小少、ローム大～小少、同粒中。
- 2 赤褐色土 焼土小・粒極めて多、ローム粒中。
- 3 薄褐色土 焼土中微、同粒中、ローム小少、同粒中。
- 4 黄褐色土 焼土粒飛、ローム小中、同粒多、焼けて脆くなっている。
- 5 赤褐色土 焼土多少、同粒極めて多、ローム粒少。
- 6 褐色土 焼土粒飛、ローム粒極めて多。



第4図 1・2号炉穴 1～3号土坑

し、壁は緩やかに外傾する。坑底西側は一段深くピット状に掘り込まれており、開口部は楕円形を呈し、深さ40cmを測る。このピットは外壁に沿う側はほぼ直線的に、坑底へと連なる側は外傾して立ち上がる。 長軸方向 N-72°-W 覆土 覆土中より径2~3mm程度の焼土粒が多量に出土しているが、坑底面に被熱の痕跡は見られなかった。 遺物 出土していない。 所見 覆土観察等から縄文時代の所産と考える。

2号土坑（第4図：PL3）

位置 C-4グリッド。北側に10cm程離れて2号炉穴が位置する。 規模・形状 長径85cm、短径75cmの不整円形を呈し、深さ38cmを測る。断面形は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。坑底は開口部と相似形をなさない。 覆土 暗褐色土を基調とする単一層である。 遺物 出土していない。 所見 覆土観察等から縄文時代の所産と考える。

3号土坑（第4図：PL3）

位置 B-3グリッド。 規模・形状 長径1.68m、短径1.02mの楕円形を呈し、深さ1.32mを測る。坑底は平坦で壁は外傾して立ち上がる。 長軸方向 N-4°-E 覆土 黒褐色土を基調とする単一層である。 遺物 覆土中位よりやや下で縄文時代早期撚糸文系の土器片が出土したが小片のため図示していない。 所見 形状と出土遺物から縄文時代早期の陥し穴と考える。

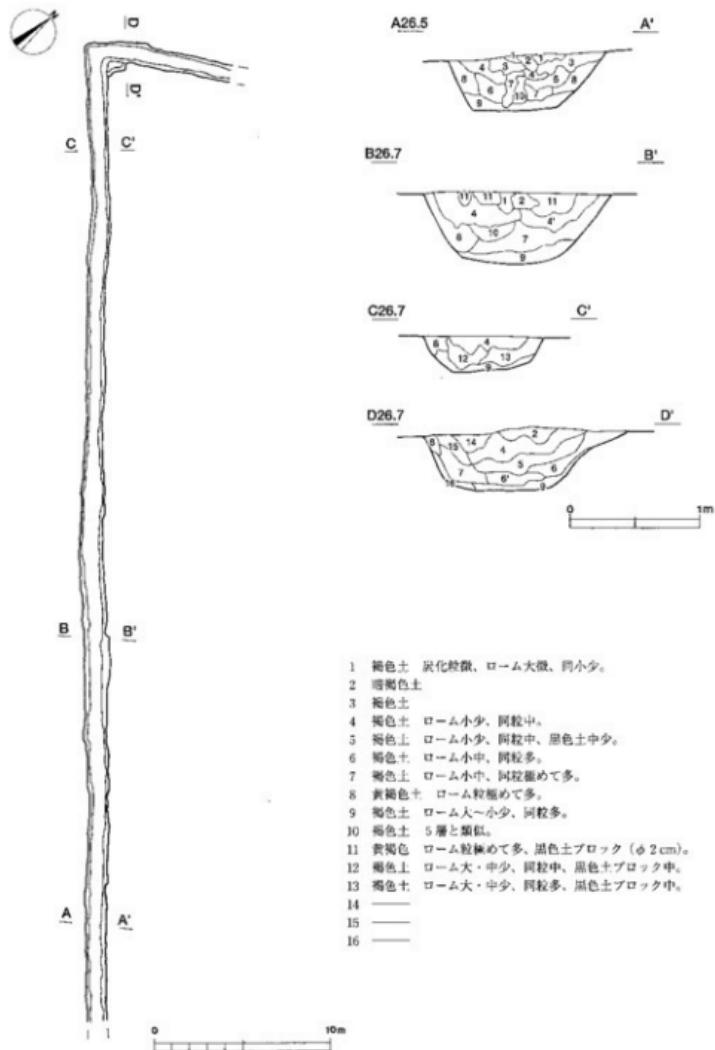
1号溝（第5・7図：PL4）

位置 調査区中央C-3~17、D・E-3に位置する。2号炉穴と重複関係にあり、本遺構が新しい。 規模・形状 南東から北西にかけて56m程直線的に延びており、C-3グリッドで方向を変え、約80°の傾きで8m北東に向かい屈曲している。溝の両端は調査区外へと延びており、全体は捉えられていない。長い側は台地縁辺に沿うように延びている。坑底は全般にわたりほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは38~55cmを測る。屈曲部内側は階段状を呈し、溝本体にかけて低くなる。 長軸方向 C-3~17側はN-50°-W、D・E-3側はN-52°-E。

覆土 A-A'以外は壁崩落土と考えられる黄褐色土が西・南側でのみ見られた。これは台地縁辺側に対し台地中央側の方が壁崩落土が堆積する以前に褐色土相の土砂が流入しやすいためと考えられる。 遺物 第7図45~47の五領式と思われる土師器が出土している。他に小片のため図示していないが天目茶碗片が出土した。 所見 覆土観察等から中・近世以降の所産と考える。

出土遺物（第6~8図：PL5~8）

土器 1~37は縄文時代早期に相当する。1~11は撚糸文系の上器でいずれも原体が縦位に回転

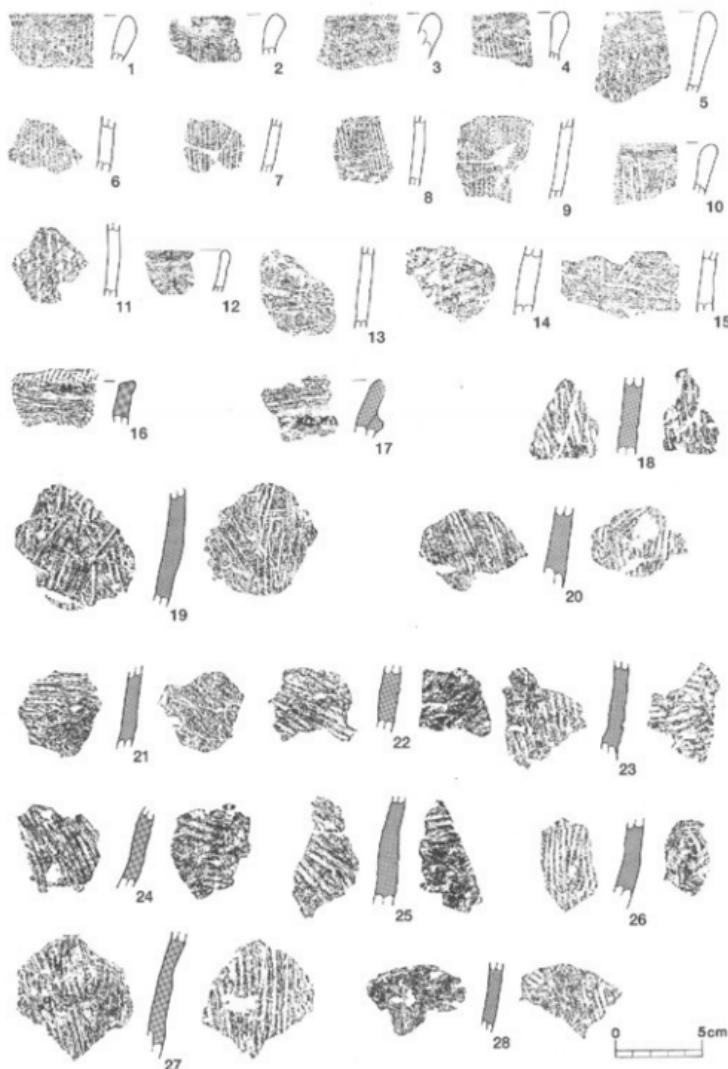


第5図 1号溝

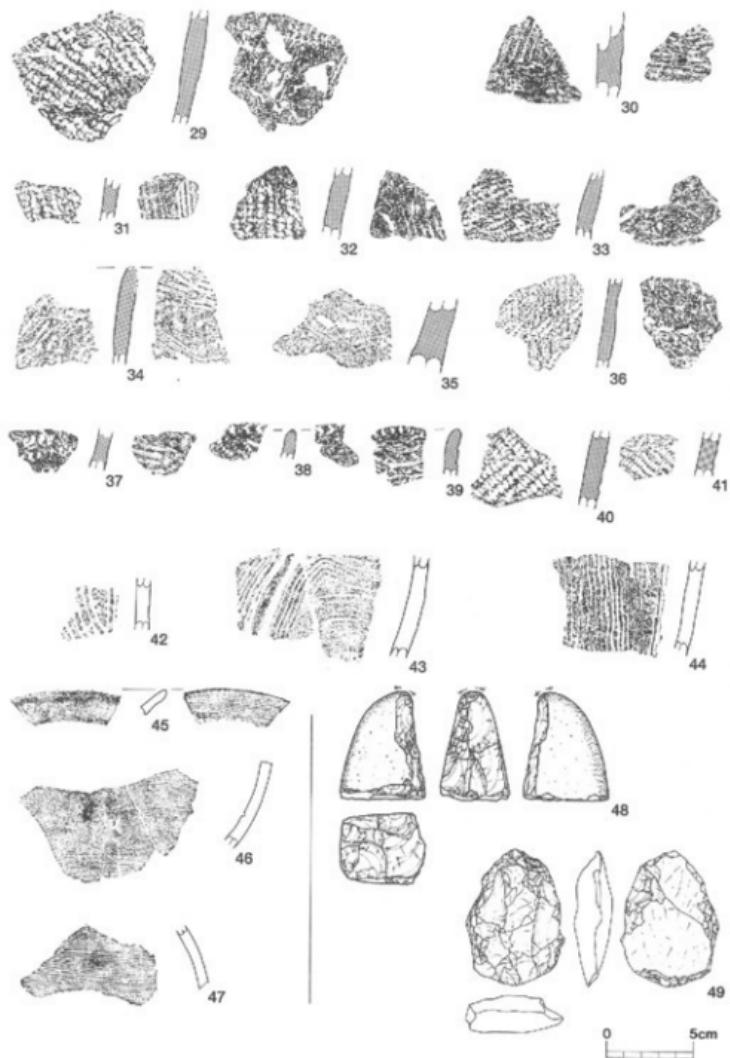
される。1～5は口唇下が幅の狭い無文帶で下半にR撚糸文、4は撚糸文間に無文部が見られた。6～9はR撚糸文が施文される。10は口唇直下が幅の狭い無文帶で下半はR撚糸文、11はL撚糸文がともに間隔をあけて施文される。稻荷台式に相当しよう。12～15は後続する無文土器と思われる。12は口縁部で先端が丸みを帯び外面無文、13・15は外面横位の擦り、14は斜位の擦りがみられた。14は沈線文系に伴うものかもしれない。16～28は胎土に纖維が混入する条痕文系の土器である。16は平坦な口唇部に貝殻条痕文が見られ、外面は横位の擦りがみられた。17は平縁に沿い刺突が連続する隆帶文が1条巡り、内面は横位条痕文である。18・26・27は外面縦位条痕文、19・20・22は内外面斜位条痕文で19は不規則であった。21は外面横位、内面斜位条痕文、23は外面縦位、内面横位条痕文、24・25は外面斜位、内面横位条痕文、28は外面浅く縦位、内面は横位・斜位に貝殻条痕文が施文されていた。17は茅山下層式に相当すると思われる。29～37は外面に縄文、内面に条痕文が施文される早期末葉に相当する一群で、いずれも胎土に纖維を混入していた。29・32は外面単節LR、内面は斜位条痕文、30・33は外面単節LR、内面は30は横位条痕文で、33は擦ったような仕上げとなっている。30は押圧か。31は外面単節LR、内面は縦位条痕文、34は外面無節LR、内面は斜位条痕文である。35は外面は浅く単節RLがみられ、36は外面は縦位条痕文の後、単節LRが間隔をおいて施文される。内面はともに擦ったような仕上げとなっている。37は絡条体が2段押圧され、内面は横位条痕文が施文される。38・39は早期末葉から前期初頭に相当すると思われる。胎土には纖維を混入していた。38は口唇部に貝殻による刺突が連続し、下半は単節RLである。39は波状縁で口唇部に刻文が連続し、地文は単節RLで2条1単位の弧線文が描かれていた。40・41は前期前半関山式に相当する。明瞭な0段多条RLが羽状に施文され、胎土には纖維を混入していた。42は前期後半に相当すると思われ、地文を単節RLとし半截竹管状工具による区画文が描かれている。43・44は中期後半加曾利E I～II式に相当する。43は地文5～6条1単位の条線文で、曲線的な隆帶文が施文され、44は地文L撚糸文上に沈線が1条垂下している。45～47は古墳時代前期と思われる土師器で、いずれも壺形土器である。45は口縁部で外面はヨコナデ、内面は刷毛目が見られた。46・47は外面刷毛目で内面はナデである。

石器 スタンプ形石器1点、笠状石器1点、石鎌1点、削器1点、磨石類3点、剥片5点の合計12点が全て遺構に伴わず出土した。うち7点を図示している。

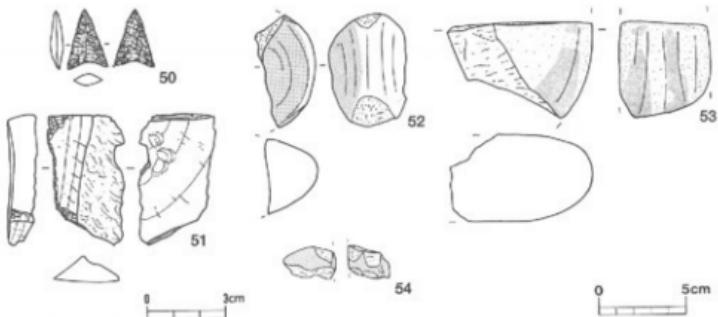
スタンプ形石器（48）は片側縁に調整剥離を施し、底面にも求心的な剥離を施している。底面の後縁は使用のためか摩滅が著しい。この石器は多摩川流域の撚糸文期の遺跡では多量に出土するが、東関東地域では出土例が少なく貴重な例といえる。笠状石器（49）は刃部が曲刃で、両側縁には敲打調整によるつぶしがみられない。石鎌（50）は側縁を直線状に整形した凹脚鎌。削器（51）は両側縁にバルブが生じた微細剥離が連続している。腹面側に被熱による「火バネ」が生じている。磨石類（52・53）はともに折損品で、研磨面と敲打面が器体に残っている。（52）は被熱赤化が認められる。



第6図 出土遺物—1



第7図 出土遺物—2



第8図 出土遺物—3

石器観察表

(単位: cm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 材	備 考
48	スタンプ形石器	6.17	4.90	4.08	140.5	砂 岩	底面の後線が摩滅。
49	範状石器	7.71	5.67	2.01	91.7	チャート	
50	石 繖	2.25	1.53	0.47	1.1	チャート	片脚端を折損。
51	削 器	5.04	2.90	1.08	16.1	珪質頁岩	ボジ面に火バネ。上下両端を折損。
52	磨石類	6.20	2.99	4.27	95.5	花崗斑岩	被熱による赤化。
53	磨石類	7.95	5.39	5.19	284.4	ホルンフェルス	
54	剝 片	1.98	2.08	2.27	13.3	砂 岩	磨製石器の再生時に生じた調整剝離。

まとめ

今回の調査面積は約530m²という小規模なものであった。しかしながら縄文時代の土坑が3基確認され、早期の炉穴が2基検出された。その周辺には早期を主体とした遺物包含層が見られた。同包含層中には土器をはじめ、石器・自然礫が出土した。土器は早期撚糸文系土器群の稻荷台式から中期に及ぶが、その中心は早期後半条痕文系土器群である。炉穴の帰属する時期についても早期後半に位置付けられるものと考えられる。石器では、スタンプ形石器や範状石器があり注目され、いずれも早期の所産と考えられる。特にスタンプ形石器は、稻荷台式期の可能性が考えられ、その多くが南関東を中心にしており、利根川以北での出土例は僅少なことから貴重な出土例といえる。溝の作られた時期については、出土遺物から、中・近世以降の時期が想定される。溝はその形状から、区画を意図して作られたものと考えられる。区画内にあたる部分にも確認調査を実施したが、遺構は確認されず、近世以降の陶磁器片が出土したのみである。興味を引くのは、溝の一部が現状の地境と同様な方向性を示していることである。

遺跡遠景



確認調査状況

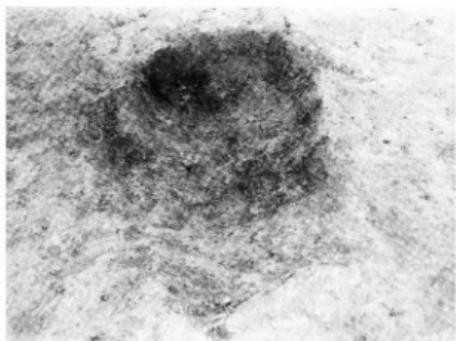


確認調査状況

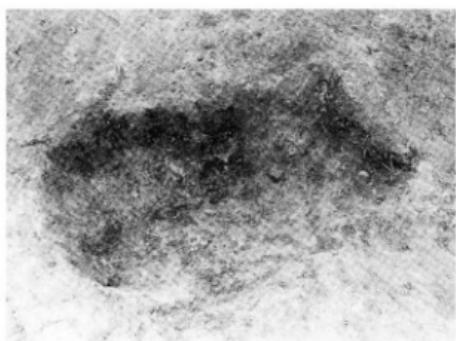


遺跡遠景・確認調査状況

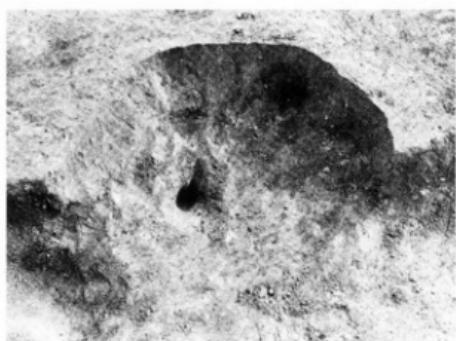
P L 2



1号炉穴

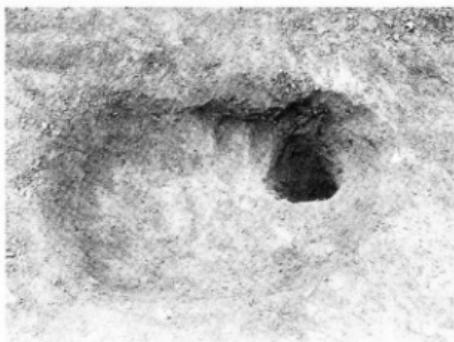


1号炉穴



2号炉穴

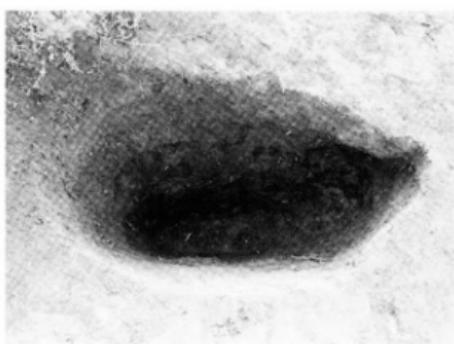
1 · 2号炉穴



1号土坑



2号土坑



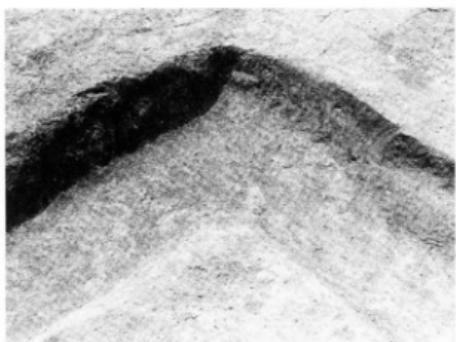
3号土坑

1~3号土坑

P L 4



1号溝全景



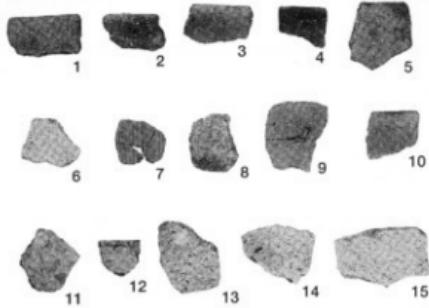
1号溝（部分）



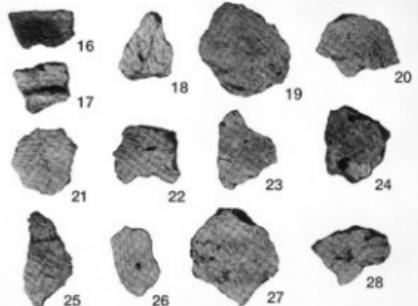
1号溝土層堆積狀況

1号溝

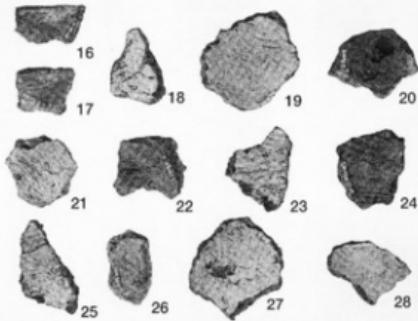
縄文土器 1



縄文土器 2 (表)



縄文土器 2 (裏)



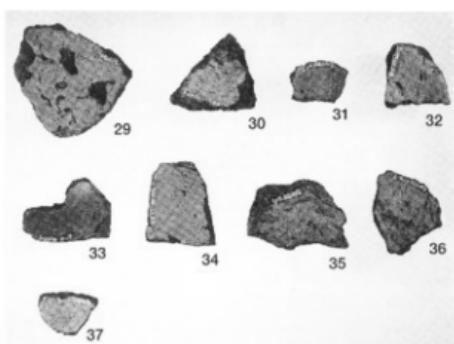
出土遺物 (1)

P L 6

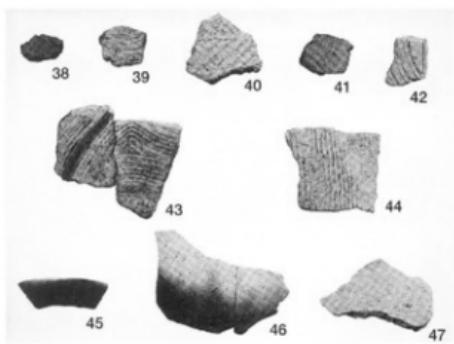
縄文土器 3 (表)



縄文土器 3 (裏)



縄文土器 4
土師器



出土遺物 (2)

P L 7

スタンプ形石器（表）



48

スタンプ形石器（裏）



48

鎧状石器（表）



49

出土遺物（3）

P L 8

範状石器（裏）



49

石鎌、削器



50



51

磨石類



52



53

出土遺物（4）

報告書抄録

フリガナ	しりびやしみなみいせき はくつちょうさ ほうこくしょ					
書名	尻冷南遺跡発掘調査報告書					
著者名						
卷次						
シリーズ名						
編著者名	福田 札子 雨宮 瑞生 藤田 恵一 関口 満					
編集機関	土浦市遺跡調査会 〒300-0812 土浦市下高津2-7-36 土浦市教育委員会 ☎0298(26)3483					
発行機関	土浦市教育委員会 〒300-0812 同 上					
発行年月日	1999年3月31日					
フリガナ	フリガナ	コード				
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
しりびやしみなみいせき 尻冷南遺跡	いばらきけんつちうらしおあざ 茨城県土浦市大字 なかぬきあざさかいのまち 中貫字境ノ町1466外	08230 C-78	36度 6分 38秒	140度 13分 00秒	平成5年4月19日 ~4月23日	約530m ² 宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
尻冷南遺跡	集落跡	縄文・中近世以降	炉穴・土坑・溝	縄文土器（早期前半～中期後半）・ 土師器・陶器・石器（スタンプ彫石器）	早期の土器は 稚荷台式や茅山下層式土器 が目立って出土している。	

土浦市遺跡調査会組織 (平成5年度)

会長	須田 直之	土浦市文化財保護審議會長
副会長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理事	大塚 博	土浦市文化財保護審議委員
理事	廣田 宣治	土浦市企画課長
理事	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
理事	内海崎保生	土浦市耕地課長
理事	野口 幹雄	土浦市区域整理課長
理事	山田 和也	土浦市都市計画課長
理事	大塚 重治	土浦市土木課長
監事	永井 進	土浦市教育委員会教育次長
監事	飯田 章次	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本 昭	土浦市教育委員会文化課長
幹事	加倉井藤雄	土浦市教育委員会文化課主査
幹事	塙谷 修	土浦市教育委員会文化課主幹兼学芸員
幹事	石川 功	土浦市教育委員会文化課主幹
幹事	黒澤 春彦	土浦市教育委員会文化課主事
幹事	中澤 達也	土浦市教育委員会文化課主事
幹事	関口 満	土浦市教育委員会文化課主事

調査者名簿

(現地調査)

調査担当	関口 満
調査員	井上敏明
調査作業員	大坪美知子 加藤博司 郡司征子 坂本みつい 佐藤真一郎 鈴木秀雄 富島利治 野口絹子 野口八重子 安田トミエ 山口仁一 横浜長一郎

(室内整理作業)

調査員	福田礼子 雨宮瑞生 崎田恵一
整理作業員	遠藤成江 大野美津子 川田光子 小松崎廣子 植名まさ子 須貝和子 富田シズエ 浜田久美子 松川さち子

尻冷南遺跡

—宅地造成工事事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 1999年3月31日
編集 土浦市遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
土浦市下高津2-7-36
0298(26)3484
印刷 株式会社あけぼの印刷社